

小笠原ミニシンポジウム

小笠原の 自然と文化と歴史 研究者に期待されること



2019年3月7日【木】

13:30~17:30

小笠原村地域福祉センター2階会議室

東京都立大学（現：首都大学東京）の小笠原研究の始まりは、小笠原が日本に返還された1ヶ月半後の1968年8月に実施された海洋生物学者でもある團 勝磨総長を団長とする調査団の派遣である。一方、私の小笠原研究は、1995年7月、環境庁国立公害研究所（現：環境省国立環境研究所）から都立大に助教授として異動した後に始まった。当時、すでに都立大は小笠原研究の中心であり、植物生態学研究室でも小笠原の植物や植物群集の研究を継続・展開していた。そのため、私の新たな研究フィールドが小笠原になったのは自然であった。

私は、大学院生のころから、一生に一度だけ繁殖して枯死する一回繁殖型植物の個体群動態と生活史の進化について研究していたこともあり、小笠原でも関連した研究を展開できないかと考えていた。オオハマギキョウという固有植物が一回繁殖であると知り、この植物に会ってみたいというのが、私が小笠原に渡島した最初の動機であった。父島に小笠原の植物について生き字引のような方がいるとあって紹介されたのが、安井隆弥先生である。安井先生から、オオハマギキョウはヤギがいる父島では絶滅に瀕しているが、父島の属島の東島にはまとまった数の個体が生存していることをうかがい、調査を開始した。その結果、オオハマギキョウは発芽してから繁殖するまで、東島では平均4～5年程度かかること、温室などで肥料を入れて成長を促進すると1～2年で繁殖することなどがわかった。

10年にわたり東島のオオハマギキョウの個体群の拡大過程の調査を継続していたが、2006年の夏に突然オオハマギキョウが姿を消した。その後の調査で、クマネズミによる食害がその原因であることが明らかになった。この事件により、外来生物の脅威を実感したことが、その後ギンネム、モクマオウなど外来植物の研究に注力するきっかけとなった。東島のネズミは殺鼠剤散布により2010年に根絶され、その後オオハマギキョウの個体群は回復しつつある。

2007年に首都大と東京都が連携し、IBO（小笠原自然文化研究所）をはじめ、さまざまな専門の小笠原研究者と協力して南硫黄島の学術調査を実施した。実は、私自身は現地には行かず、裏方として参加したのだが、小笠原の自然の価値を再認識する機会となった。この調査結果は、2011年6月に小笠原が世界自然遺産に登録される際にも科学的な成果として活用された。

2010年から、野生化したヤギにより生態系が大きく劣化した聳島列島の媒島をフィールドとして、ヤギを駆除した後の生態系の変化について、総合的な研究を開始した。この研究をとおして、ノベル生態系（Novel ecosystem）の考え方の重要性に気づいた。ノベル生態系とは、原生の人間の影響を受ける前の生態系とは異なるが、人間の管理なしでも持続可能な生態系と定義される。たとえば、在来種と外来種が持続的に共存する生態系はノベル生態系といえる。

23年間の小笠原研究をとおして、強く意識するようになったのが「研究者の社会的責任」である。研究者は、自然に対する理解を深めることをめざして研究しているが、小笠原では研究活動そのものが保全上の障害にならないよう最大限の配慮が求められる。この考えを理屈ではなく、研究活動をとおして身にしみて実感するのが小笠原である。今後も、研究者として小笠原の世界遺産級の自然と多様な価値観を持つ人との共生にむけて、貢献していきたい。



東島（父島列島）のオオハマギキョウ

表題について研究者がなすべきことは、以下の3つであると演者は考える。

1. 小笠原で発生する渇水の要因について解明すること

2018～2019年も渇水である。しかも今回は、2年前(2016～2017年)に比べて、父島の水道用ダムの貯水率が大きな速度で減少している(下図)。

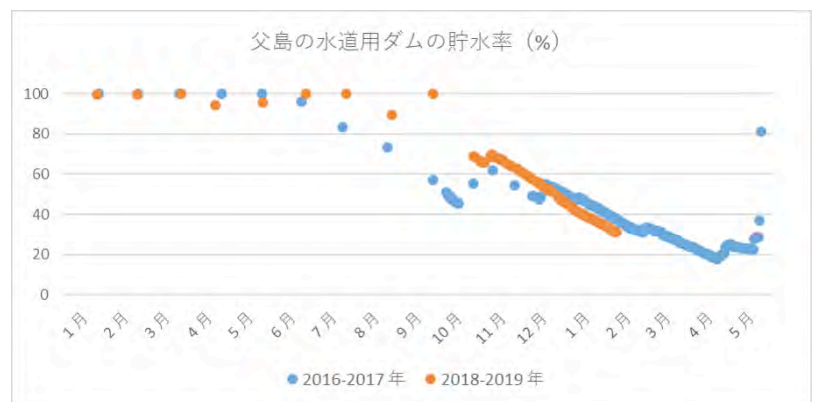
2016～2017年の渇水はエルニーニョ現象終息後に生じた。2019年2月現在、エルニーニョ現象は継続中なので、今回の渇水の状況は2年前とは違っている。このような身近な現象について、「なぜそうなるのか？」を説明するのが、研究者の役割の一つだと考える。



2. 小笠原の古文書を解析して19世紀末の気候変動について解明すること

母島の村民会館には、「大関文庫」がある。これらの中には、父島における19世紀の気象観測記録が記されているものもある。なお、父島気象観測所で観測が始まったのは1906年7月である(1885年にも気象庁が観測を行なっている)。

北太平洋の島々における19世紀末の気象観測記録は報告されていない。実は、室町時代の頃から明治時代のはじめ(19世紀末)にかけては世界的に寒冷で、現在よりも約 1.5°C 気温が低い「小氷期」であった。そのため「大関文庫」中の気象観測記録の分析は、「北太平洋における小氷期の終焉はどうだったか？」という位置づけもある。このように、小笠原の古文書を持つ学術的意義について説明し、実態を明らかにすることが、研究者の役割の一つだと考える。一方、19世紀末に気象観測を行っていた扇浦の役場の位置など、地元の方のほう詳しいと考えられることもある。



3. 小笠原の水資源量の分布について明らかにすること

小笠原の気候・水文研究でネックになっているのが、「長期間の気象観測を行っているのが、父島気象観測所(大村)に限られる」ことである。一方、島の南部に多い父島の水道用ダムの貯水率は、流域から集めた水を表しており、空間的広がりを持つ。

水資源量の分布を調べるのに、衛星画像の解析が有効である。衛星画像からは植生の活性度を求めることができ、渇水の年はそうでない年と比べて活性度が小さくなるであろう。そのため、植生の活性度を分布型で求めて水道用ダムの集水域で集計し、それと貯水率を比較するのは研究者が取り組まなければならない課題である。ただし、この研究の難点は、(1)人工衛星が来る時に小笠原上空が雲で覆われている場合が多かったり、欠測があったりすること(雲があると、その下の植生の状態が捉えられない)、(2)多数の衛星画像を購入するのに高額な研究費が必要なこと、である。

小笠原に伝わったハワイ語、英語、八丈島方言が混じり合って島独特な小笠原ことばが形成された。1997年から東京都立大学（現：首都大）の学生をはじめ、天理大、京都文化女子大、東京外大、東大、大阪大、国際基督教大などの学生と一緒に島に来て島民から小笠原ことばについて聞き取り調査を継続的に行なっている。



私の研究分野である「社会言語学」ができた1960年代から「社会」のためになる研究が目標とされて来た。私の場合、父島のビジターセンターで講演会を行なったり、奥村の地域福祉センターで公開シンポジウムを開催したりするのがその一つのやり方である。島の人から教えてもらった情報をまとめて本や研究論文にする形もある。2005年に橋本直幸氏と一緒に編集したCD-ROM付の『小笠原ことばしゃべる辞典』や2018年に刊行した『小笠原諸島の混合言語の歴史と構造』は、学術図書の出版事情によって6000円、8000円という値段が付いてしまったが、福祉センター2階の図書室に行けば島民は借りることができる。

去年は思いもよらなかった形でこれまでの研究が役立って大変嬉しかった。それはNHKの「ファミリーヒストリー」という番組に寄せられたルーツ探しの視聴者からの依頼の手紙に始まった。島根県に住む依頼者は自分の先祖は小笠原の「帰化人」（明治時代の言い方）だということまで分かったが、そこで情報が途絶えてしまった。

個人のルーツ探しは言語学と縁のない作業のように思えるかもしれないが、実は、情報収集が難航していた大きな原因は、明治に日本に帰化したこの小笠原島民の氏名に数通りの異なった表記（片仮名、スペル）が使われていたことにあった。そこで音声学や文字論の知識（方法論）や長年収集してきた社会言語学研究の資料の活用ができた。すなわちSavoryがセーボレーと表記されたり、セボリと書かれたり（もちろん「瀬堀」という当て字も使われる）するように、島根県の先祖の人は仮名表記があったが、これはランダムなバリエーション（恣意的な変異）ではなかった。この発表でその言語学的、社会的、歴史的な要因を考察する。英語の方言の発音から、江戸時代の小笠原社会における太平洋諸島民のニックネームの付け方（慣習）まで、そして日本語の変体仮名から旧仮名遣いと発音との関係まで様々な要因について考える。



島の人から小笠原のことを教えてもらう

1. マーシャル諸島における行進踊りと踊り歌の成立

キリスト教や西洋文化の影響をいち早く受けたマーシャル諸島において、20世紀初頭までに西洋の軍事訓練の動作を真似た動作を取り入れた踊りが創作された。これがもとになって、「ワン、ツー…」、「レフト、ライト」などの掛け声と西洋風の踊り歌をうたいながら踊り手が隊列をなして入退場をする、「行進踊り」が成立した。



2. 行進踊りの旧南洋群島全域への伝播

日本統治時代に入ると、行進踊りはマーシャル諸島から東カロリン、中央カロリン、西カロリン、北マリアナのサイパンへと、次第に旧南洋群島全域に広まった。「レップ、ライツ」(ポンペイ)、「ネップ、ロイ」(パラオ)など掛け声や動作のローカル化が見られるようになり、踊り歌には外来語、現地語を混用した各地の西洋風の流行歌が用いられるようになった。踊り歌は、しばしば演目名となる。

3. 小笠原に伝わった踊り歌の特徴 (1920～30年代前半)

小笠原からサイパンに出稼ぎに行ったジョサイア・ゴンザレス(1899-1935)らが、カロリニアンに習った行進踊りを伝えた。現行の演目でも、《夜明け前》《締め踊りの歌》以外の《ウラメ》《ウワドロ》《ギダイ》《アフタイラン》は現地語起源の歌詞からなる。なかでも、《ウワドロ》は、《ウアトロフィ》として旧南洋群島各地で知られる演目であった。



東京都無形文化財に指定されている小笠原の行進踊り「南洋踊り」

4. 旧南洋群島での日本語歌謡と行進踊りの創作 (1930年代後半～1940年代)

1930年代後半の旧南洋群島では、レコードが普及し日本の流行歌が広まった。《パラオの5丁目》《レモン林》として小笠原に伝わった日本語歌謡もこの頃創作された。一方、沖縄出身者を含む現地在住日本人は、《酋長の娘》《カナカの娘》など日本の流行歌を踊り歌とする行進踊りを創作し、余興とした。当時、小笠原でも行進踊りは余興だった。小笠原系と沖縄系では成立期が異なることは、演目の比較によっても明らかである。

5. 小笠原と沖縄における行進踊りの現在

小笠原で行進踊りが再興した1968年の返還の頃、沖縄でも旧南洋群島帰還者が行進踊りを余興とし始めた。2000年、小笠原の行進踊りは小笠原固有の「南洋踊り」として東京都無形文化遺産指定され、保存会によって継承されている。一方、沖縄では独自の余興文化と結びついて、各地で工夫が凝らされローカル化が進んでいる。一例として、竹富島仲筋の「バッサイロン」と呼ばれる行進踊りは、ハイテク素材の黒装束をまとった男女の踊り手が三線の伴奏で踊るが、5年前からは化粧の代わりに仮面を用いることもある。



竹富島仲筋の行進踊り「バッサイロン」

小笠原諸島は世界的にも稀有な自然環境を有している。可能な限り保全されてきた生態系は、日本だけでなく人類の宝とも言えよう。2011年に世界自然遺産に登録されたことは、まさに小笠原の育んできた生態系の希少性を裏付けている。小笠原諸島における世界にも類を見ない自然環境は、いかにして守られてきたのであろうか。島民たちによるたゆまぬ努力の結果であるということは、疑いようのない事実である。そのことに加えて、島内にあまり多くの人々が暮らしていなかった時代にも目を向ける必要がある。すなわち、世界においてありふれた問題とも言える島の軍事利用により、皮肉にも小笠原の自然環境が守られてきたという側面である。なぜならば、小笠原諸島はその地理的および地政学的な特性から、1945年から1968年にかけて、およそ四半世紀もの間、米国によって極めて排外的な秘密基地とされたからである。小笠原は世界文化遺産にならなかったことが不思議なほど、歴史的にも極めて独自性に富む地域なのである。



上記のことは、恐らく小笠原に暮らす方々にとって、改めて聞くまでもない常識的なことなのではなかろうか。ところが、本州で講演等を行う際や取材を受ける時などには、いつも小笠原諸島の地理的背景や入植期の歴史から話を始めなければならない。つまり、小笠原諸島は、現状を理解するうえで前提となる知識が非常に複雑なのである。事実、大多数の日本人にとって小笠原は「世界自然遺産」の島というイメージに終止した、教科書に歴史が詳述されることもない未知なる島、換言すると、「周辺」なのである。こうした悩ましさは、他の小笠原研究者にも共感いただけるのではなかろうか。この度は、父島の方々を対象とするシンポジウムである。そのため、歴史的背景に基づく小笠原の特殊性に着目するのではなく、敢えて小笠原の抱える現代的な問題の普遍性について、主に日米関係の文脈でともに考えられる内容にしたい。

具体的には、硫黄島に焦点を当てる。米国が施政権を握っていた頃、硫黄島にはいかなる軍事的価値が認められ、そしてどのように軍事利用されていたのであろうか。返還交渉時、米国は日本に返還の見返りとして何を求め、そして日本はどのように応じたのであろうか。こうした背景知識は、いずれも返還後の硫黄島の軍事利用継続にともなう帰島問題に対する日本政府の対応を理解するうえで鍵となる。そして最後に、日本における「中心」と「周辺」の普遍的従属関係の継続なかに、小笠原返還50年の歴史を位置づけてみたい。



米兵の訪問が絶えない摺鉢山山頂にある海兵隊の記念碑

1. はじめに

—古絵図・古写真と今を比べる—

(倉田洋二 寫真帖小笠原増補版)

- + 変化を調べる
- + 地形、植生、人工物、人々、動物
- + 何が変わったか、変わらないものは何か?
- + 写って (描かれて) いないものも大切



2. 1862年 (文久年間) 小笠原島真景図 国立国会図書館他

3. 1875年 (M8) 松崎晋二 小笠原島写真 25枚 国立公文書館他

(森田峰子 中橋和泉町松崎晋二写真場)

4. 1878年 (M11) 内務省勸農局出張所 北袋沢開設
農務顛末

5. 1883年頃 (M16頃) 各写真・小笠原島写真 42枚
(宮内庁書陵部)

北袋沢

6. 1883年頃 (M16頃) 小笠原嶋誌 内閣文庫
潰し石、ノネコ、ノブタなど

7. 1893年 (M26) 北澤正誠 (仮題) 小笠原諸島図
(小笠原村教育委員会蔵)

母島絵

8. 1897~1906 (M30年代) 小笠原島附八丈島写真帳
内 34枚 (宮内庁書陵部)

英語塾など

9. 1917年 (T6) ウイルソン撮影、33点の写真
父島大根山他、兄島、母島、向島

10. まとめ

- ・ 歴史・自然研究と絵画・写真
- ・ 歴史学、地理学、文化人類学、生物学等の総合科学による研究
- ・ 個々の写真・絵画の詳細な解析

11. さいごに

Team Wilson in the Bonin への誘い



1893年 (仮題) 小笠原諸島図



1917年 父島大根山から大村を望む

小笠原諸島返還 50 周年、日本島嶼学会設立 20 周年、首都大学東京の小笠原研究 50 年を記念して、日本島嶼学会と首都大学東京小笠原研究委員会の共催、小笠原村の協力で、ミニシンポジウムを開催します。発表者は、自然、人文、歴史など多様な分野の専門家や研究者です。それぞれの分野の研究成果を概観した上で、総合討論では、研究者に期待されることについて、研究者に加えて様々な立場の島の関係者も交えて議論します。

【プログラム】

13:30	趣旨説明 可知 直毅 (首都大学東京・理学部)
13:35	沖縄と奄美からのメッセージ紹介 沖縄県復帰っ子連絡協議会 (ビデオメッセージ) 奄美群島の日本復帰運動を伝承する会
13:40	23 年間の小笠原研究を振り返る 可知 直毅 (首都大学東京・理学部)
14:10	小笠原の気候・水文研究とコミュニティへの還元 松山 洋 (首都大学東京・都市環境学部)
14:40	小笠原ことばの研究とコミュニティへの還元 ロング ダニエル (首都大学東京・人文社会学部)
15:10	休憩
15:30	南洋から伝わった小笠原の音楽の系譜 小西 潤子 (沖縄県立芸術大学・音楽学部)
16:00	日米関係史における小笠原の特殊性と普遍性 真崎 翔 (名古屋大学・国際開発研究科)
16:30	小笠原諸島の古絵図・古写真を読む 延島 冬生 (小笠原村在住・元小笠原村職員)
17:00	総合討論 小笠原研究者に期待されること 演者全員、島内関係者

【主催】 日本島嶼学会／首都大学東京小笠原研究委員会

【協力】 小笠原村

首都大学東京
小笠原研究委員会

<http://www.tmu-ogasawara.jp/>



【懇親会のお知らせ】 18:10 より「ボニーナ」にて行います。
当日参加希望の方はこちらまで → 090-2447-5398 (可知)

当日参加
OK